

聖書：コリント人への手紙第一 10：7～13

説教題：試練に耐えられるように

日時：2022年9月4日（朝拝）

前回読んだ10章1～6節は、今日の新約時代のクリスチャンたちにとって衝撃的なメッセージを語るものだったのではないのでしょうか。そこではパウロが「私たちの先祖」と呼ぶ新約の教会の先祖、旧約のイスラエルが、私たちと同じ洗礼や聖餐式の恵みにあずかりながらも大部分が荒野で滅びたということが言われました。これは重大な警告を語るものです。それは私たちも洗礼を受け、聖餐式にあずかっているから大丈夫、救われるだろうとは必ずしも言えないということです。もちろんバプテスマや聖餐式は神が備えてくださった大いなる恵みの手段ですが、それらを受けていけば後は自動的に救われるというのではない。9章27節でパウロは「失格者にならないように」と語っていましたが、荒野のイスラエルの大部分は失格者になったのです。驚愕すべき事実です。旧約聖書にこのことははっきり書いてあるのですが、もしかすると私たちはこのことを十分に心に留めていなかったことを思われるのではないのでしょうか。この実例から私たちはしっかり学ぶ必要があります。

さて、その彼らについて6節に「食った」と言われていましたが具体的にそれはどんな姿を指すのか、今日の箇所には4つのことが示されています。そのことを順番に見て行きます。一つ目は7節の偶像礼拝です。7節に、聖書には「民は、座っては食べたり飲んだりし、立っては戯れた」と書いてあるとありますが、これは出エジプト記32章6節のことです。モーセが十戒を受けるために山に登っている間、そのふもとで民は金の子牛を造ってどんちゃん騒ぎをしていました。ここで金の子牛を拝んだことよりも、「食べたり飲んだりした」姿に焦点が当てられているのは、コリント人のある者たちが異教の神殿で飲み食いしていたこととの関連をクローズアップするためでしょう。先祖たちはこの道を進んで滅びを刈り取りました。そのことを心に留めなくてはなりません。

2つ目は8節にある通り、淫らな行いです。これは民数記25章1～9節に記されているモアブの娘たちと淫らなことを行った時のことでしょう。これは偶像礼拝と結びついていました。イスラエルの民はバアル・ペオルとくびきをともにし、また淫らな行いをしました。コリント教会にも淫らな行いの問題があったことがこれまで述べら

れて来ました。主に 5～6 章で見ました。そういうことをし続けても救われるということはありません。6 章 9～10 節：「思い違いをしてはいけません。淫らな行いをする者、偶像を拝む者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、・・・は神の国を相続することができません。」ここにイスラエルの民は一日に二万三千人が死んだと言われる一方、民数記 25 章 9 節には二万四千人が死んだと言われています。ある人々はこの 1000 人の違いについて色々論じていますが、ここではその詳細な議論に立ち入る必要はないと思います。数はほぼ同じですし、これは数のまとめ方あるいは丸め方の違いによるのでしょう。どう解釈するにせよポイントは同じです。神の戒めを無視して、このように自分のやりたいように生きた人、自分が主となって貪る生活へと進んだ人は最後の救いに入れなかったのです。

3 つ目は 9 節のキリストを試みることです。旧約時代のイスラエルがキリストを試みたとはどういうことかと思われるかもしれませんが、すでに 4 節で彼らは霊的な岩であるキリストから飲んだと言われていました。ですから旧約聖書で「主を試みた」と言われていたことは、実質「キリストを試みること」だったということでしょう。イスラエルの民が主を試す罪を犯したことは色々なところに書かれています。後でもう少し詳しく述べますが、荒野を旅した期間は彼らイスラエルが試されていた時でした。ところが彼らは自分たちが試される側であることをそっちのけにして、逆に主を試しました。主は私たちが本当に救ってくださるのかどうかと色々な方法で主をテストしました。その彼らは蛇によって滅んだと言われています。これは民数記 21 章 4～6 節に記されています。主は燃える蛇を彼らに送ったことにより、蛇は彼らにかみつ き、イスラエルのうちの多くの者が死んだと記録されています。

そして 4 つ目は 10 節にある通り、不平です。彼らが神の導きに不満を持ち、つぶやき、文句を言い、反抗したことも度々記されています。そのため様々な災いが彼らに臨みました。民数記 14 章 37 節では疫病が送られて民が死にましたし、民数記 16 章のコラとその仲間が反抗した事件では、彼らの足元の地面が割れて生きたまま飲み込まれたと記されています。

これらの私たちの先祖に起こったことは、ただ過去に起こった一つの出来事と言うだけのことではありませんでした。これは後の世代のための戒めとなるものでした。11 節に「それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするため

す」と言われています。私たちはそこから学び、自分に当てはめて、同じ誤った道を行くことがないようにしなければなりません。ですから 12 節に「立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい」と言われます。コリント人たちは、自分たちは「立っている」と思っていました。自分たちは大丈夫である。自分たちは立派な知識を持っている。霊的に成熟した者たちであり、エリートであり、もうほとんどゴールに達している。しかしここで「立っていると思う者は」と言われていますように、これは彼らがそう思っているということだけを言ったものです。実際はそうではないかもしれない。往々にして自分はしっかり立っていると自認している人こそ危ないということでもあるのでしょう。彼らは、そして私たちは、誤った安心感を持っていてはならないのです。やはり 9 章 27 節で見た通り、「失格者にならないように！」という正しい緊張感を持った、懸命な取り組みが必要なのです。あのパウロが、ピリピ書 3 章でも「私は、自分がすでに捕らえたなどとは考えてはいない。むしろ、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって、前傾姿勢で走るランナーのように一心に走っている」と言っていました。その姿に倣わなければならないということです。

さてパウロは警告だけではなく、最後の 13 節で励ましも語ります。それは試練のただ中にあるコリント人たちが絶望しないためです。むしろどこに目を向けて歩むべきか、どういう基盤に立って取り組むべきか、大切な真理をここに語ります。まず彼は「あなたがたが経験した試練はみな、人の知らないものではありません」と言います。ともすると私たちは試練に会うと、これは自分にだけ生じた特別のものだと思いやすいものです。なぜこんなことが私に生じたのか。こんな悲惨な目に遭っているのは私だけではないか。そして私は何と哀れな人間だろうか。何とかかわいそうな人間だろうかと思い、心がそれだけで弱くなってしまいます。戦う前から負けてしまいます。しかしパウロはそれは「人の知らないものではない」と言います。つまりそれは皆が知っているものであるということです。それは人間に共通のものである。ですから自分だけが特別ではないのです。大なり小なり、それは歴史の中で多くの人が味わい、経験して来たところのものなのです。

そして言います。「神は真実な方です。あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいません。」ここで注目したいのは「耐えられない試練にはあわせない」と言われていることです。つまり私たちとしてはその試練に耐える必要があるのです。反対から言えば、私たちは自分が試練に耐えることをしないでにおいて、神にだけ真実

を求めることはできないということです。7～10 節で見たことも、すべて神の御手下で起こって来たことであり、それらは全部耐えられない試練ではありませんでした。ところが荒野の民は耐える歩みをせず、安易に道を踏み外しました。そうしておきながら、「神は真実なんですよ？それなのにどうして私たちを救わないのか。どうして滅ぶままにされたのか。これでは神は真実であるとは言えないのではないか」などと言うことはできません。自分たちのことは棚に上げて、ただ神を問うことはできないのです。

これは言い換えれば神を試してはならないということです。試練において自分が神の戒めを守らない生活へ進みながら、神はそれでも私を救うのか救わないのかなどと試すようなまねをしてはならない。私たちは神をテストしてはなりません。試練において試されているのは私たちの方です。ここを取り違えてはならないのです。しかしそうして神の試練の下に身を置く私たちにとって、この 13 節は非常に大きな慰めを与えてくれる真理ではないでしょうか。ここに神は真実な方であり、私たちを耐えられない試練にはあわせないとされています。つまり耐えられるようにとレベルを調整した上で、神はそれを与えておられる。コリント人たちが実際に置かれていた試練とは、偶像の宮で偶像に献げた肉を食する食事会に出るべきかどうかという問題でした。当時のコリントでも、様々な市民的・社会的な会合は、そういう異教的な場所で異教的な祭儀のもとに行われたようですので、信仰を持ったクリスチャンたちにとってそれは大きな試練でした。それに出席しないと社会生活が難しくなることが予想されます。その地の有力者と仲良くしてもらえず、むしろ嫌われ、迫害されることにもつながります。経済生活も厳しくなることが予想されます。キリストを信じて救われたと思ったのに、思いもしなかった困難に投げ込まれます。そういう中で、偶像の神は実際には存在しないのだから偶像の宮であろうとどこであろうと一緒に行って食事することは問題ないと主張するクリスチャンたちもいました。さてどうすべきでしょうか。そういう状況で、ここに「耐えられない試練にあわせることはない」と言われています。つまり目の前の試練に自分たちは耐えられるということです。ですからおそこで主に忠実に歩むことが求められています。真実な神を信じてです。そしてこれは私たちが直面するあらゆる試練にも当てはまります。神は私たちを耐えられない試練にはあわせません。ここを字義どおりに訳せば、私たちの能力以上のものは与えないという表現です。ですからどんな試練であれ、それはこの私に耐えられるものとして神が与えておられる。神が調整してそのことをなさっている。それが私のさ

らなる霊的な成長と祝福につながるものとしてです。

さらに「むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていてくださいます。」と続きます。ここでも「耐えられるように」とある通り、私たちが耐える歩みをすべきことは前提にされています。決して私たちが誘惑に負けても神は守るとか、それでもいいよいいよ、それでも神はあなたを救うよ、などとは言われていません。もちろん私たちは正しい道から外れて罪を犯すことがあります。しかし神が備えてくださり、私たちに求めているのは試練に耐える歩みです。ですから私たちは悔い改めであるべき歩みへと立ち返って行かなければなりません。そういう人に、この約束は与えられています。ここに「試練とともに脱出の道も神は備えている」とあります。まさかの脱出の道、思わぬ出口です。試練の中で私たちはしばしば出口が見えない状態に置かれます。この調子では将来の希望が見えない、どのように考えても出口はないとつぶやきやすい。しかし神はまさかの脱出の道を用意しています。参考になるのは創世記 22 章のイサク奉獻の記事です。聖書で一番最初に試練という言葉が出て来る箇所です。そこで神はアブラハムに一人子イサクをモリヤの山でささげよ！と命じます。およそ信じがたい命令です。しかしこの主の命令に従ったアブラハムには、ご存知の通り、まさかの脱出の道がありました。我が子を屠ろうとしたその瞬間、「それで十分である。その子に手を下してはならない。あなたは神を恐れていることが良く分かった」と天からの声がありました。そして目を上げてみると一匹の雄羊が角をやぶに引っ掛けていました。イサクの代わりに捧げるいけにえが予め用意されていました。アブラハムはこの山をアドナイ・イルエ、「主の山の上には備えがある」と呼びました。神はそのような人間には思いもよらない脱出の道、解決の道を用意してくださっています。その真実の神を信じて御言葉に従い、試練に耐える歩みをするようにとパウロは励ましているのです。

以上、私たちも様々な試練の中に置かれることがあると思います。その時、私たちは思いやすいものです。なぜ私にだけこんなことが生じたのか。神は私を見捨てておられるのか。もう守ってくださらないのか。そう考え始めると自暴自棄になりやすいものです。そして主が守ってくださらないなら、自分で自分を守るしかないと考えて、人間的に妥協した道さえ進もうとします。しかしそれはイスラエルが進んだ道であり、滅びに至った道でした。そんな私たちにパウロは試練をどう見るべきかを示してくれました。それは人の知らないものではない。歴史の中で多くの信仰者たちが通って来

た道である。あなただけの話ではない。神は真実な方であり、あなたがたに決して耐えられない試練を与えることはなさない！と。本当に感謝です。私たちは私たちが経験するあらゆる試練をこの光の下で捉え直したいと思います。また神は試練とともに脱出の道も備えていると約束くださっています。私たちは自分のすべきことをしないで、神をテストするような者でありませんように。私は神をテストする側にいるのではなく、私が神によってテストされているのです。しかしそのことを受け止めて神に信頼する者には大きな希望が与えられています。私たちはこの信仰のもとに、与えられる試練の中で神に信頼し、真実な神の力を味わって、それを乗り越えさせていただく者とされたいと思います。そしてこの試練をくぐり抜けたところにあるさらなる霊的な成長と祝福、最後の救いに至る歩みとを導かれて行きたいと思います。